

予定調和 じゃないから 面白い

新しい喜びを見つけよう

南條勉さん



【センター職員】

南條さんは、「ちょうふチャリティーウォーク」という今やライフワークとなっている活動があると思いますが、それが始まった経緯などを改めて私達に教えて欲しいなと思っています。

【南條さん】

はい、ありがとうございます。

そうですね、まずは自分の生い立ちとして、私はふるさともなく、変な話調布とも縁もゆかりも何もなかった。生まれたのは東京世田谷ですけれども、親父が転勤族で、彼自身20何回ぐらい転勤している。私もだから生まれてから多分10何回ぐらいは転居している。幼稚園も3回ぐらい変わっています。

何を言いたいかっていうと、普通は社会貢献というと、まず生まれ育ったところがあり、仲間がいて、何かやろうかというような背景があるが、私にはまずそのバックグラウンドがなかった。

尚且つちよっといろんな理由で、親父の転勤もあるんですけれども、アメリカの大学に行ったりとかもしているんで…ほら、同じ大学行ったらいろんなサークルで、何か友達ができたりあるじゃないですか、でもそういうのも実はなかった。なので寂しい奴だったんですよ。

その後、マイクロソフトに入り、色々がんばり、Wordを作っていた。社内ではExcelの奴らはとか言いながら、基本的に敵を作ることと結束を高めていた。大体どの会社の部署でもそういうもんでしょうけど、そういうので、わいわいがやがややっていて、ちょうど1995年ぐらいに調布のこの京王線沿いに色々な施設を作りましょうという話になって、調布技術センターという開発部隊とサポート部隊が入る建物を借りることになったんです。

そこで初めて調布を知りました。

私は東京都ってのは都バスが走ってるもんだと思っていたんです。ゴミ収集車とかも東京都なんとかってというのが当然走っていると思っていたけど違うんだ…と、東京都下っていうのはこういうところなんだってぐらい当時ショックを受けました。

会社は電通大の隣なんですけど、あの頃は90センチぐらいしか道幅がない道を通して調布駅から15分ぐらいかけて会社に通ったんですけど、ただ調布駅に降りる、会社に行く、ちょっと飲み屋に行くことはあってもそのぐらいであまり調布の街っていうのには興味がなかった。そういうふうに過ごしていました。

そのころ、マイクロソフトでは毎年大きなパーティーをやっていたんですね。

クリスマスパーティー、外資系ってのは大体年に1回すごいパーティーをやるっていうのでお金を使うんだけど、ちょうど2007年、多分リーマン・ショックのタイミングだったと思います。その時にがつつり売りが落ちてコントリビューションマージンという、これだけはちゃんと利益をアメリカに送りたいなのがあって、そのためにはもうパーティーは中止するっていう話になったんです。

それまでは高輪プリンスとか芸能人が披露宴とかするような場所を借し切ってやるような、そういう大きいパーティーやってたのをやめて、各事業所に1人当たり2,000円でパーティーしなさいとなったんです。

その時に私は社長に呼ばれて、南條君ちょっとこれやってくんないって言われて、いや、2,000円でパーティーですかみたいな、何やるんですかみたいな感じで。

でも一応その社長はよく考えてくれて、「どうだろうチャリティーイベントをやってみたらどうか」と。

もうこれはどうして彼がそこを引っ張り出したのかわからないけれど、私もその時は「それはなんだ？」と思ったんですが、でもそれは面白そうだと。チャリティーをみんなで盛り上げて、お金を集めてどこかに寄付する。

まだ実は寄付するところも何も決めてなくてスタートしたんですけど、結果として、じゃあだったらみんなで盛り上げてやりましょうとなり、部長たちにはワインでも寄付させて、それをまたオークションパーティーで吊り上げて、そしてみんなに振舞うみたいな。そんなことをやりましょうということで、結果として30万円ぐらいかな。利益が出て、それをせっかくだから95年から調布にお世話になっているし、調布のために何かできることをしようと調べてもらったら、市民活動支援センターにえんがわファンドがありますよと知り、そのえんがわファンドにお金を持って行くことになったんです。

私とすれば市民活動支援センターもえんがわファンドも、なんじゃそりやという状態、でも寄付していいことがあるらしいということで、会社でせっかくチャリティーイベントをやったんだから、じゃあ寄付をしましょうと。ここが市民活動支援センターですよ、「はい、私はマイクロソフトの南條です」と「仕事としてお金を持って参りました」、「ありがとうございます」となって、そこで終わるはずでした。

でもその時に当時の市民活動支援センターの職員から、ちょんちょんと、「南條さんせっかくですから何か一緒にやりましょうよ」と言われて、全くそのところは本当にもう99%「いや、結構です」何も知らないしと思ったんだけど、色々口説かれて知らない間に何か、「はい、喜んで」と言わされたのか覚えていませんが、今度チャリティーウオークというイベントの準備委員会がありますので、それに来ていただけませんかと言われて、行ったことが、本当にこの「ちょうふチャリティーウオーク」のきっかけなんですね。

マイクロソフトでチャリティーイベントをやって、それをたまたま届けるという役目をやり、そのときに「いえ、結構です」と断り切れずに、感覚としては準備委員会だから顔を出す程度でいいのかなと。

何かもういろんなものが決まっていて、南條さんここに立っていてくださいよとかその程度のお付き合いなのかなと考えていました。

せっかくの付き合いですからね、それをお断りするのもし訳ないなと思って準備委員会に行ったら…

今から思えば、あの頃の調布の市民活動のそうそうたるメンバーがテーブルを囲んでいたんですけど、当時は全くわからずに、何か僕は資料が何もないなあみたいなね、普通会社とかでミーティングするとか、何か資料があって何月何日どういうテーマでどうやってっていうのはないんだなあと思いながら、皆さんが座って会議が始まりますっていう場面でセンターの職員の第一声が「さあどうしましょうか」と。

何も決まってないのかよ。とんでもないところに来てしまったなと。

仕事で会議とかいろいろやるのはいっぱい見っていますが、こんな会議は初めて見ました。しかもです、さあどうしましょうかっていうところで、みんな怒り出すんじゃなくて、普通は予定調和の世界ですから怒り出しますよね、「なんで何も準備してないんだ」って感じで、準備もしてないのになんで呼びつけたんだと。でもあーでもないこーでもないとめちやくちやな話をどんどん参加者1人1人が話すんですね。その光景に本当に圧倒されました。なんだこの人たちは、何をやってる人なんだみたいに思ったんですけど。

でも、本当にちょうどそれが12月のクリスマスパーティーとか年末年始のころだったので、自分の頭の中では仕方がないけれども、乗りかかっちゃった船なので、何とかしたいし、でも自分としてはなんかあんまりモチベーションが湧かないし、何か圧倒されちゃってるしと。そういうので多分悶々としてうたた寝をしていた正月の時に偶然私のモチベーションというものが降ってきたんです。ちょっと夢を見たんですね。

その夢はよく話すんですけど、私は30年後になぜかそのチャリティーウォークっていうイベントに参加者として歩いている。しかも誰かと手を繋いで歩いている。その手を繋いで歩いているのはどうやら自分の孫らしい。そして自分はこの孫に対して自慢しているんですね。おじいちゃんがこのイベントを始めたんだよって言って、言ってみればそのチャリティーウォークの準備委員会で多分自分の中で一番刺さったのは、何か新しいことをやるんだって言うところが一番刺さったんでしょね。

それが言語化したのが自分が30年後の自慢をしている夢を見て、新しいことを何か生み出すってことはすごく夢のある、面白いことなんだと。

そしてそれがいつも一緒にいる会社のメンバーじゃない、全く新鮮な違う世界の人たちと一緒に何かやるんだってことはこんなに自分にとってモチベーション、社会にとってのモチベーションとかは全然関係なく、まず自分にとってのモチベーションとして、何かこれは面白いことなんだと思ったんです。

ちょっと話を戻せばその時は会社の中でも少しマンネリ化していた頃だったと思います。それも大きかったと思います。何か新しいものを求めていた。

マイクロソフトっていうのは大きな会社ですけど、日本の組織は小さな組織で、続けているとそれなりにもう何か行き着くところはなくなりつつある。開拓するところがなくなりつつあるところだった自分もあったので、そういう何か新たな、別に仕事じゃない、でも面白いということで、第2回準備委員会があったときの後のお酒の席で、私は会議よりもお酒の会の方が実は重要だと思うんですけど、そこでポロッと実は30年後の自分が自慢してる夢を見たんですよっていう話をしたら、そこでじゃあもう南條さん実行委員長ですねというふうに言われてしまったんです。でもその時はもういやいや困りますではなくなっていて、喜んでわかりました、お受けしますとなっていた。

ちょっと話を端折っちゃったかもしれないですけど、実はこういう会社以外での活動って何もしていなくて、すごい不安だったんだけど、それが何か逆にそれを乗り越える、やりたいというようになってしまった。

まあその時の飲み会が楽しかったのかもしれない、今思えばそこだったのかも知れないですけどね。

でも本当にそもそもチャリティーウォークって何？っていう話や何か杉並でやってるらしいよと聞けば、じゃあ今度杉並を視察に行くかとか言ってみんなで歩きにも行きました。あ、このぐらいでいいんだとかね、これでできるんだとか、そんなことを感じて帰ってきました。

実際えんがわファンドでどういう助成先団体がいて、どういうふうに使われているかっていうのはあんまり関係なく、まずはそういう仕組みがあるんだから、その仕組みを周知する。

なおかつ収益をえんがわファンドにうまく還元するというイベントを、初めて調布でやる。まだ日本でもやっているところは少なく、みんなが参加できるし、これはいいイベントだなと。

だからこれはどっちかっていうと後付けです。立て付けが重要であったわけじゃないんですよ。

それなりに筋が通っていて、自分は30年後自慢している自分を実現したいという気持ち。

だから変な話その頃から会社でも逆のフィードバックなんですよ。

具体的には、半年や1年のプランではなく、5年10年の壮大なプランを考えるようになりました。

結果として何ができるのか。

ちょうどその頃は、会社の人事的なこともやらなければいけない立場だったので、どうやって人を循環させるか、組織の大きさは変わらないという中で、どうやって人を循環させるのか、その1つが実はアメリカに人を輸出するっていう取組みです。より良い人をせっかくなんだからあなたのキャリアは日本だけでなくアメリカでもっと活躍できるよと言ってあげてそういう場を作るための資金を作って、3ヶ月か半年、アメリカのチームで仕事をさせて、向こうもこんなにいい人がいるなら来てくれとなる。

本当にそうそういう形でうまく、でもそれも多分1年1年とかで考えていたら、そんなこと思いつかなかったと思います。どうやってその仕組みを作ってそれがまわることによって花開いていく人を作るか。それが一番。

その結果、組織も陳腐化せずに新しい人が入ってくるし、卒業していく人も嬉しい。そういう、30年プランって重要なことなんだなと思いましたね。

【センター職員】

ずいぶん価値観が変容していそうですね、仕事でもプライベートでもということなんですね。

振り返ってみて今という時点になると思うんですけど、そういうふうに変わってきた自分って、よかったなあとか、どんな評価なのか、ぜひ教えてください。

【南條さん】

なるほど、うーん、良かったかどうなかはわかりません。

家族からもあなた何やってんのよみたいなね、仕事が忙しいのか変な用事がいっぱいあって、忙しいのか。

正直仕事をいっぱいやっていた頃、仕事1本だった頃はいかに仕事をしない日があるかと、用事がない日があるかが、一番幸せな自分だったのが、こういう何か、新たな広がりのある、だからそれをなんていうのかな…

社会貢献なのかな。地域の1人のプレーヤーとして何らかの形で関わるが増えていく。

そこで、用事があることがすごく嬉しくなる。

だからなんかね、三つ四つあって、そんなにやらなくてもいいだろうっていうところなんだけれども、やりたくなっちゃう自分がいますね。

結局、仕事でボーナスいくらもらえましたとか、何か役職がつきましたとかっていうことよりは、何かこういう人たちと楽しく何かを作りあげる、毎年これは絶対やろうねと工夫しながらやる喜びの方が金銭的な喜びよりもどんどん増してきた。こういう出会いがなかったら、今頃は一体何してたんだろうなと、どういう人生だったんだろうなと思うので、それを考えるとやっぱり良かったなと思います。

【センター職員】

とても面白いお話ですね。でもそういう場面に出会わなかったら、南條さんの言葉を借りると未だに予定調和の仕事の世界観みたいなところに居続けたのかもしれないということですね。見える風景がどんどん変わってるんだなっていう感じですかね。

【南條さん】

そうです、だからチャリティーウォークをやり始めて数年経ったときに、調布駅に降り立ってまわりを見回すようになりました。実際に風景が変わって見えるんですよ。同じ駅で同じ道で会社に行くんだけど、あれ、もしかして誰か知ってる人がいるかもしれない、という雰囲気歩くようになりましたね。

だから面白いですよ。本当に自分の世界だけ、大きな東京、調布だ国領だっていう本当にこの世界だけで生きることだってできる。けれどもちょっとでも濃い繋がりができると、あれ？もしかして、誰かに見られてるかもしれないとかそういう意味じゃないんだけど、なんか誰か居るかもしれないなっていうのが歩いているときの自分の変化です。

あとはそうですね、社会貢献っていうか元々マイクロソフトですから、ビルゲイツは50歳を過ぎてで半分以上引退して、慈善団体を作ってプライオリティを決めてマラリアとか撲滅したいことを色々やられてるわけですよ。だからある意味、彼なんかはすごいな、ヒーローだなと思っていた時期もあるし、でも彼がそう変われるんだったら自分も変われるのかもしれない。もちろん彼のような財力はないけれども時間はある。

だったらその時間をどう使うのかっていうところで、チャリティーウォークの流れで私がお社を引退した後に最初に見つけたキーワードはファンドレイジングだった。

全くそれも、いや正直チャリティーウォークを6、7回やっていてもファンドレイジングのファの字も知らなかったんだけど、たまたまお社を辞めた後にチャリティーウォークで知り合った仲間からちょっと何かこういうイベントがあるんで一緒に行きませんかと誘われて、行ってみたらたまたまファンドレイジングっていうキーワードで講演されている方がいて、かっこいいじゃないかと。

でも何か話を聞いていると、これってもしかしてチャリティーウォークってファンドレイジングだったの？みたいなそれくらいのレベルで。でも私たちはファンドレイジングの1つの方法をチャリティーウォークという形で実践していたんだと。これもチャリティーウォークをやっていたからそういうものに対して興味が出て、実際に学んで資格を取って、そういうものを実践できるような自分になりました。

【センター職員】

すごいですね。なんか、憧れますね。

【南條さん】

いや、だからガツガツいってるわけじゃないんだけど、結果として見ると筋が通った。自分の節目に、こういう市民活動とか、チャリティーウォークと出会わなければまさしくそういうね、つまらない人生を送って、何をやるかわからないけれど時間を浪費するような人生だったのが、何かすごく、サードプレイスじゃないけど、やっぱりお社とかそういう予定調和の中だけじゃない、何か世界を知ることは、何かのきっかけになるんですよ。もちろんそれを生かすかどうか、私がうまく生かしているかどうかはわからないですよ。でもそのきっかけは絶対ありますよね。それは確信できる。

【センター職員】

やっぱり節目節目の出会いみたいなのが今の自分を形づくったと。振り返ってみると思うわけですね。

ちなみに、今後の目標とかありますか？

【南條さん】

今後の目標ですか、やはり30年プランなのであんまり早く実現しちゃうといけないけど、でもあんまり遅いと実現できなくなっちゃうという、そろそろそういう年代でもあるし、一つありますよ。

それはファンドレイジング、チャリティーの延長線上で、私の夢はミニストップのパフェが提供できるキッチンカーを運営したいと思っている。

そのキッチンカーは地域に貢献するための、そして、何しろ美味しいミニストップのパフェを広めるためのキッチンカーです。

やはり子供たちが美味しいって言っているものとそういうものをうまく収益として使ってそれをまた寄付に持っていく。ビジネスっていうのは儲かることが全てではない。もちろん、初期投資とか色んな物に関して回収はしないと持続性がないことはわかるんですけども、でも自分としたら何台かそういうパフェ専用のキッチンカーを作り、おいしいパフェを残すということは、人類にとって大変重要なことなんじゃないか。何より自分のためでもあります。それが1つかな。

でももう一つはやはり何らかの出会いで、あんまりガツガツその出会いを増やしていく気はないけれども、例えばファンドレイザーになった理由の1つは、やはりそういう本当に心底支援したいと思うような団体、または人に出会えるきっかけ、入り口になる、自分も支援できますよということから出会うことができるわけですから、でもそういうところから本当にお知り合いになって自分自身も、この人たちのやることであれば、託せるな、夢があるなとなるわけですよ。

実際にそこでよくよく知ることによって、最終的に本当に自分のかなりの援助をもしできるような、出会いがこれから生まれれば、こんなに幸せなことはないと思っています。

【センター職員】

ありがとうございます。共感とか、要は他者との関わりによって生まれる何かというものを大切にしてきた。

過去を振り返っても節目節目で重要な人物との出会いがあったり、今後もそういう重要な人物になるであろう人たちと出会ったりしていきたい。それが南條さんの生き方として貫かれているんだろうなと感じました。

【南條さん】

そうですね。

他人に頼ってるっていうね（笑）もちろんいい意味でとってますよ。でも、あんまり自分自分でやって成功した試しがない。何をもって成功かというのはありますが。

自分はどちらかっていうと振り返るとこの人がいたから今の自分はいるなとか、こういう出会いを求めているなとか、本当にねミニストップの社長さんにもいつか会いたいですね。キッチンカーを作るのに社長さんとの出会いは必須ではないんだけど、やっぱりその出会いがなきゃ自分としては満足いかないんですよ。自慢できない。

こういうことでミニストップのためになるんですよ、地域貢献にもなるんですよ、そんないい話ないじゃないですかっていうことを面と向かって言いたい。それそこが重要だろうと。自己満足ですね。

【センター職員】

ちなみにあともう1個質問なんですけど、これから地域に出て何かしたいと思う人やまだそういうことを意識していないという人も「ふくしの窓」を読んでもくれると思います。その方々に何かメッセージはありますか？

【南條さん】

そうですね、自分の経験からすると、何かわかんないなとか、多分こういう分野って普通に仕事をされてる方から見ると、なぜわざわざこれやらなきゃいけないの？時間を見つけてまでと思うけど、少なくとも私の経験からすると、こういうものに関わった方々は、誰もが楽しそうにやっているとします。だから絶対に踏み入れて損はないし、ちょっとでもいいから触れてみるといいんじゃないでしょうか。ぜひトライしてみて、一度入ったらもう組み込まれてあなたはもう抜け出せませんよっていう世界じゃないし、でも、そこでいろんな出会いもあるし、いろんな達成感もあるし、もちろんたまには色々な憤りを感じることもあるでしょう（笑）でもそれはどこだってそうだし、そういう経験も含め、やっぱりいろんな経験ができるという入り口があるので、ぜひ参加してみてください。

僕は、話の中ではもうこれは待ってましたみたいなことを言いましたけれど、本当はすごく不安もある中で

始めたことでしたが、でも結果としてこんなに嬉しい結果になっている。

なので、ぜひ一歩踏み出していただければ、また新しい世界、新しい喜びが見つけられて、それが結果的に社会のため、町のため、いろんな人のためになるわけですから、楽しんでくださいというメッセージです。

【センター職員】

南條さん貴重なお話をありがとうございました。